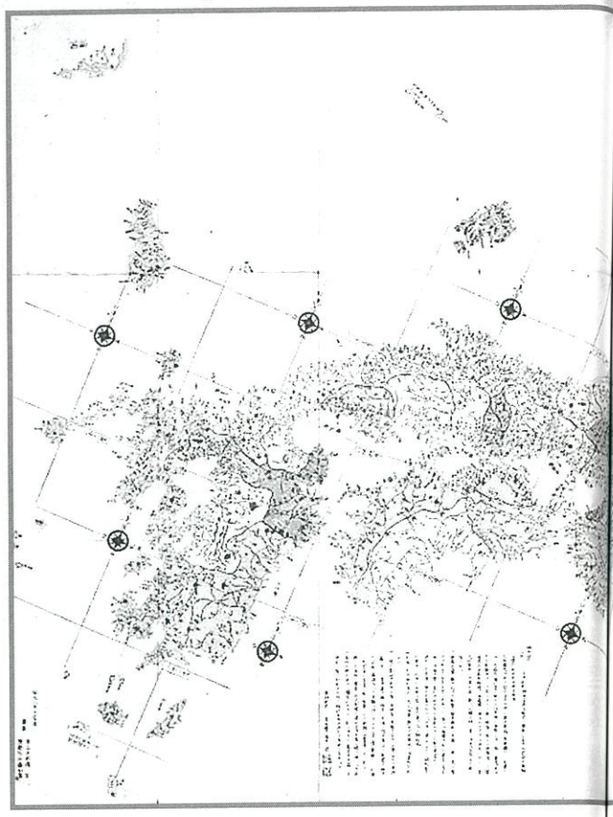
◉異能者の肖像◉　文＝皆神龍太郎

知られざる江戸時代の地理学者 長久保赤水 フリーメーソンが 世界に広めた驚異の日本地図

伊能忠敬が完成させた
「大日本沿海輿地全図」より
数十年も前に
正確な日本地図を作製した
人物がいた。
しかも、その地図は
およそ１世紀もの間、
旅のお供として日本中で
使われていただけでなく、
海外にも広まっていたという。
そのきっかけを作ったのが、
日本に初めてやってきた
フリーメーソンだった。
驚異の日本地図は
どのようにして作られたのか？
そして、どのようにして
世界に広まったのだろうか？



独学で日本地図を完成させた長久保赤水

江戸時代に作られたこの日本地図を見て、「あ、この地図なら知っている。伊能忠敬が全国を歩きながら実測して作った伊能地図でしょ」と思われた方も多いのではないだろうか？　だが、これは伊能忠敬が作った地図ではない。伊能忠敬が彼の地図を完成させる半世紀近く前、正確にいえば42年も前に、農民出身の独学の地理学者が、たったひとりで、全国を測量することもないまま作り上げた日本地図なのである。

その男の名は、長久保赤水（1717～1801）。伊能忠敬に比べると無名の人物といってもいいだろう。

今は確かに伊能忠敬のほうが有名かもしれない。だが、江戸時代には伊能本人はもとより、伊能が作った日本地図など知る者はほとんどだれもいなかった。そもそも見ることさえできなかったのだ。幕府は伊能図をご禁制の地図と定め、幕府内から外に出すことを強く禁じていたからだ。伊能図が一般市民の目にも触れられるようになったのは、江戸幕府が滅んで文明開化が起きた明治以後のことだった。ゆえに、伊能図が江戸文化に与えた影響は、ほぼ皆無なのだ。

↑長久保赤水が作った「改正日本輿地路程全図」（高萩市教育委員会提供）。

一方、長久保赤水が安永8（1779）年に完成した「改正日本輿地路程全図」は、翌年に大坂で出版されるやいなや、日本中で広く使われる大ベストセラーマップとなった。以後90年近くの長きにわたって江戸後期の人々は、伊能忠敬の地図ではなく、赤水の地図のほうを旅の友として懐に携え、日本各地を旅していたのである。

さらにいえば、赤水図を利用したのは日本人ばかりではなかった。正確な日本の姿や位置を初めて示した赤水図は、ヨーロッパをはじめアメリカなど世界各地の博物館の奥に、今も大切に保存されていることがわかってきた。

つまり鎖国の状態にあって、外からその中をうかがい知ることが難しかった江戸時代に、日本を認識する際のスタンダードな地図として、赤水図は世界でも注目されていたのだ。そして、赤水図が世界に向けて拡散していくその過程を裏で支えていたのは、今から240年以上も前に、はるばる日本へとやってきていたひとりのフリーメーソンの存在があったのである。

↑長久保赤水の自画像（高萩市教育委員会提供）。

↑伊能忠敬が作製した「大日本沿海輿地全図」中図　東北（出典：国土地理院ウェブサイト）。

農民から学者へ 長久保赤水とはだれか？

長久保赤水とは、どんな人物だったのか。自分で描いたと伝わる自画像も含めて、赤水の容姿が描かれている絵は、今も数種類残されている。だが、残念なことにそれぞれの絵があまり似ていないため、実際にどのような風貌をしていた人物であったのかは、よくわかっていない。一方、赤水の生涯については、子孫が今もいるといったこともあり比較的よく判明している。

赤水は享保2（1717）年11月6日、現在の茨城県高萩市赤浜で庄屋を営む農家の長男として生まれた。子供のころは病弱で長生きはできないだろうといわれていたうえに、幼少期に頼りとしていた肉親をすべて亡くしている。

8歳のときに弟を亡くし、翌年には母親のおしげが、そしてその2年後には父親の善次衛門までが死んでしまうという悲劇に見舞われた。弱冠11歳にして、血がつながっていた肉親すべてを失う孤児になってしまったのだ。だが、そんな悲運の赤水を支えてくれたのは、母親が亡くなった翌年に後妻として嫁いできていた継母のおかんだった。

親戚筋からは「農家のせがれに学問は不要」などと冷たくいわれる中、継母のおかんは赤水の学問好きとその才能を深く認め、14歳のときに近所の村で私塾を開いていた医師鈴木玄淳の元に通わせて漢文などを学ばせた。そんな継母おかんの応援もあって、赤水の学問の腕はメキメキと上達。20代半ばには、のちに水戸藩の学問施設・彰